

三 左官綱太夫（六代目）

全身刺青の美聲家

三世長門太夫が江戸興行中に、門弟の登志太夫——藏前の松屋佐兵衛といふ人——が出入りの左官屋さんの息子だが、と云つて連れて來たのがこの綱太夫。全身に刺青があつて、小意氣な江戸つ子肌、馬鹿に美しい聲を有つてゐたので大阪へ連れて歸ることになつた。始め織太夫と付けて貰つてゐた。天保十一年の生れで、明治十六年四十四歳で死んだ。

忠臣藏の茶屋場で、端役も端役一力の亭主を掛合で振り當てられたので内心大いに憤慨した綱太夫否織太夫。なんとかして腹癒せをしてやらうと考へて、——離れ座敷へ灯をともし仲居ども——といふあの一句を、新作して特に抑揚に工夫を凝らして、特有の仇な美聲を振りまはしたので皆吃驚してしまつた。けれども此美音が忽ち大評判になつてしまつて、現に此時の此人の云ひ廻はしが今日まで傳はつてゐるのだから面白い。

江戸前の氣象で、可なり奇行に富んだ、變り物だつた。明治十年綱太夫と改名をした時——大江橋の芝居で、夏祭の八ッ目（團七の内）を勤めてゐた——都々逸坊扇歌と兄弟分の盃をし

た。此仲介をした講釋師の石川一口の法善寺の席で、扇歌が三味線を弾いて綱太夫が端唄を歌ふといふやうなことを遣つた。もちろん大喝采だつたといふことだが。

四 馬方彌太夫（四代目）

端場専門の豪音家

阿波の小松嶋から出て、大阪南堀江橋通高臺橋筋東に住む。始め淡路座で修業をして、大阪で長門の門に入つた。二段目物、端場語りの名人で、此人の次に語る切場の太夫は恐れを爲したといふ。千本櫻の椎の木が十八番で、簾内で語つてゐるのであるが、それでも、その次へ現はれる、すし屋の長門を喰つてしまつたといふ逸話がのこつてゐる、長門ほどの名人でさへこの通りだつた。

この椎の木を語つた時、ちよつと待ち合はせの間に、傍らの人に彌太夫は「私の聲はなんと聞こえるか」と問うて見た、すると其人は「牛のやうです」と即座に答へた。よつほど根強い唸り聲だつたと見える。

阿波の國に居た頃は馬方だつたといふ説がある。本人はさうとは云つてはゐなかつたが、世